

中級日本語学習者の拍の誤りについて  
— ストーリーナレーション中の拍の増減と誤りの位置 —

山崎 真弓

<要 旨>

中級日本語学習者3名の自発的な発話であるストーリーナレーションの発話中に、どのような拍の誤りが現れるか、また、それらが発話全体の拍の実現にどのように影響するかを観察した。

拍の誤り数と発話の全拍数により計算する誤り率に基づき、発話の拍の実現の全体的な印象を数値化することができた。拍の誤りは、特殊拍の脱落による拍の減少よりも、不要な箇所で長音化や促音化があったり、不要な休止が挿入されたりする拍の増加の方が多く見られ、単語内よりも、名詞と助詞の接続部分での拍の増加による誤りが目立った。単語の拍感覚が正しくても、助詞の選択などの文法項目を意識した時に、母語話者が行わないような休止の挿入や長音化を行ってしまい、発話全体の拍の実現を崩す結果になっていた。

[キーワード] 拍感覚 誤り率 長音化 休止 文節

0. はじめに

かなり学習が進んだ中上級日本語学習者の発話を聞いていると、ひとつひとつの音の発音は正しいのに、全体として日本語らしくないと感じることもある。その原因の一つに、拍感覚の乱れが挙げられる。多くの学習者が学習する共通語の日本語では、拍の等時性が保たれるという特徴<sup>1)</sup>があるので、拍感覚が失われた発話には違和感が感じられるのであろう。

学習者の拍感覚は、特殊拍を含む単語や、特殊拍を含む単語とミニマルペアになるような非特殊拍の単語を発話させたり、聞き取らせるテストを行い、調べることができる。しかし、学習者の自発的な発話における拍感覚の乱れは、そのような特別な単語の中だけではなく、様々な箇所に現れる。

今田(1990)には、学習者の発話の拍の誤りを数量化する方法が提案されてい

る。そこでは、発話内に拍の誤りがあるごとに1点と数え、その合計点が発話全体の拍感覚の乱れを示すようになっていく。拍の誤りの主なものは、長音、撥音、促音、拗音といった特殊拍が脱落したり、長さが短かすぎたりするもの、また、不要な箇所では長音化したり、撥音化したり、促音化したりするものである。このような場合、発話の拍感覚が保たれていない。

そこで、この今田(1900)の方法を採用し、学習者の自発的な長い発話<sup>2)</sup>の中に、どのような拍の誤りがあるか観察しようと考えた。

## 1. 調査の概要

### 1-1. 被調査者

被調査者は、1993年10月から1994年9月まで、日本語・日本文化研修留学生としてお茶の水女子大学に在籍した中級日本語学習者3名である。(表1参照)

表1 被調査者属性

学習者	性別	年齢	出身	母語
EF01	女	20代	オーストラリア	英語
SF02	女	20代	メキシコ	スペイン語
GF03	女	20代	ドイツ	ドイツ語

### 1-2. 調査方法

#### 1-2-1. 調査時期

1993年10月から1994年9月までの滞日期間中に、3回、発話資料の収集を行った。1回目は来日直後の1993年10月(GF03のみ1993年11月)、2回目は来日後約5か月経過した1994年2月、3回目は約9か月経過した1994年6月である。

#### 1-2-2. 発話資料の収集方法

発話資料の収集には、全調査を通して、被調査者に、同じ20コマの漫画(資料参照)を見せてストーリーナレーションを行わせる方法をとった。収集の手順は以下の通りである。まず、被調査者に、20コマの漫画を見て物語を考えるよう、指示し、考える時間を1分間与えた。その後、被調査者に漫画を見なが

ら日本語で物語を話してもらい、それを録音した。録音は2回行った。

ストーリーナレーションの発話を用いた理由は、ふたつある。まずひとつは、単語リストを読ませるのとは異なり、単語よりも長い、被調査者の自発的な発話なので、学習者の日常の自由発話に近いものを収集することができる点である。もうひとつは、完全な自由発話よりも語彙や発話時間を統制できるので、被調査者どうしを比較したり、同じ被調査者の誤りの変化を追ったりしやすい点である。

### 1-2-3. 発話資料の分析方法

各時期に2回ずつ録音した発話のうち、被調査者がなめらかに発話した2回目の発話のみを分析対象とした。発話中、被調査者が母語で発話した語は分析対象外とした。また、「ディズニーランド」などの外来語も、原語のままの発音で発話されることがあり、拍数の把握が困難なため、今回の分析対象から除いた。

表2 拍の誤りの種類・原因・例

誤りの種類	誤りの原因	例（*が誤り例）
拍の増加+	長音の挿入・過剰 撥音の挿入・過剰 促音の挿入・過剰	見て→*ミッテ 促音の挿入による拍の増加 木の→*キーノ 1文節内で、長音の挿入による拍の増加
拍の減少-	長音の脱落・過少 撥音の脱落・過少 促音の脱落・過少	ちょっと→*チョト 促音の脱落による拍の減少
休止の挿入		探しに→*サガ シニ 風船の→*フーセン ノ

発話資料から、拍の誤り数と全拍数を集計した。

拍の誤りは、筆者の聴覚印象により抽出した。誤りが拍の増加なのか減少なのかに分けた。増減の原因は、表2に示したような特殊拍の脱落や挿入である。1単語内で拍の誤りがある場合と、1単語内では誤りはないが、1文節内の内容語と機能語の接続部分に拍の誤りがある場合との両方を集計した。また、連続して発音されるべき1単語内または1文節内に休止がある場合、休止の挿入とした。

全拍数とは、被調査者の発話を日本語母語話者が休止せずに発話したと想定した場合の拍数を数えたものである。このみなしの全拍数により、発話の長さがわかる。例えば、「オカサンワオコリマシタ」という学習者の発話は、日本語母語話者には「オカーサンワオコリマシタ」と話されるので、12拍となる。

## 2. 結果と考察

### 2-1. 拍の誤り数と誤り率

まず、各発話の拍の誤り数と全体的な聴覚印象を見ていこう。表3に、各発話の拍の誤り数、全拍数を示した。また、3名の被調査者の発話の長さは、長いもので746拍、短いもので373拍と、かなり異なっていた。そこで、誤りの実数ではなく、誤り率（誤り数/全拍数）もあわせて示した。

EF01の発話の誤り数は、2回目の調査では増加しているものの、SF02に近い。SF02の発話は、拍の誤りが全期を通して少ない。GF03の発話の誤り数は、3回目の調査では減少しているものの他2名に比べ多い。

表3 各発話の拍の誤りの数・全拍数・誤り率(%)

	1993/10-11			1994/2			1994/6		
	誤り数	全拍数	誤り率%	誤り数	全拍数	誤り率%	誤り数	全拍数	誤り率%
EF01	11	395	2.8	21	373	5.6	14	410	3.4
SF02	13	681	1.9	12	618	1.9	8	693	1.2
GF03	22	597	3.7	30	731	4.1	11	746	1.5

3名の発話の聴覚印象を比較すると、SF02の発話が最も拍の実現が安定しており聞きやすく、EF01の発話が最も聞きづらい。GF03の発話は、発話が途切れ途切れに聞こえることがあるが、EF01の発話よりも聞きやすく、特に3回目の調査時の発話はSF02と同じぐらいの印象である。

聞きやすいSF02の発話の誤り率が低く、聞き取りにくいEF01の発話の誤り率が高い。各発話の拍の誤り率は、全体的な聴覚印象にほぼ合っている。

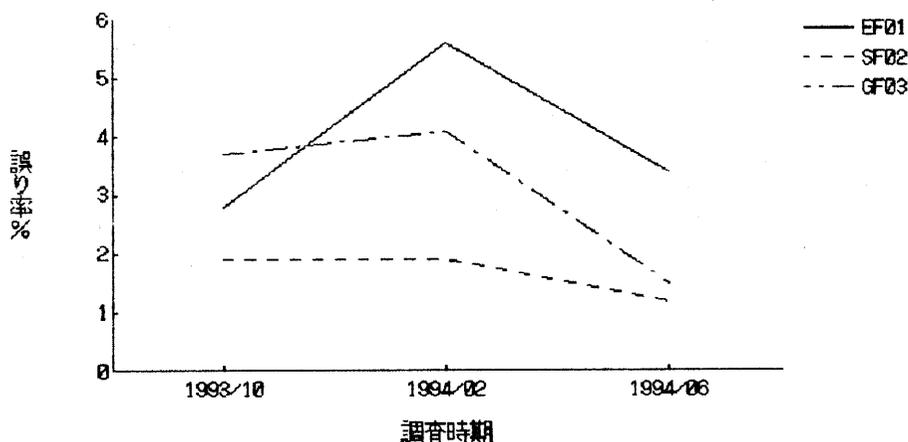


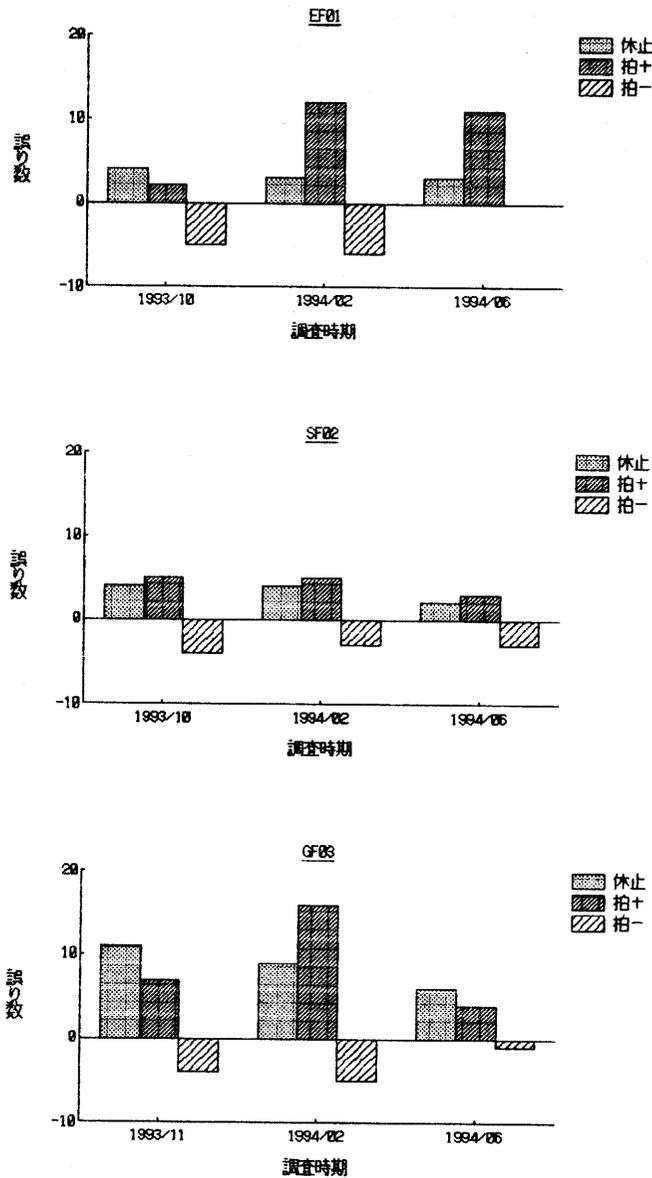
図2 各被調査者の誤り率の変化

また、図2により誤り率の変化を見ると、SF02では漸減しているが、EF01とGF03の発話では、1回目よりも2回目の調査時の方が誤りが多く、その後減少する「山型」の変化がみられる。この拍の誤りの増加については、2-3.で述べる。

## 2-2. 拍の誤りの種類

次に、拍の誤りが、特殊拍の脱落や特殊拍を意識した挿入によるものなのか、それとも別の種類の誤りなのか見ていく。

図3は、発話の誤りの種類を示したものである。



3被調査者とも、特殊拍の脱落による拍の減少の誤りよりも、特殊拍のない箇所に特殊拍を挿入してしまうことによる拍の増加の誤りの方が多い傾向がある。特に、EF01とGF03の2回目と3回目の調査の発話に顕著で、両者とも、3回目の調査では、拍の減少による誤りは、0または1個である。拍の増加の誤りが、発話の拍の実現の乱れを生み出していることがわかる。

では、拍の増加の誤りは、発話のどのような位置に現れているのだろうか。

図3 各発話の拍の誤りの種類

(縦軸の上方向は休止の挿入と拍の増加、下方向は拍の減少による誤り)

図4は、拍の増加および休止の挿入による誤りが、単語内にあるのか、それとも、名詞と助詞の接続部分のように単語を超えた文節内にあるのかを、分け

て示したものである。

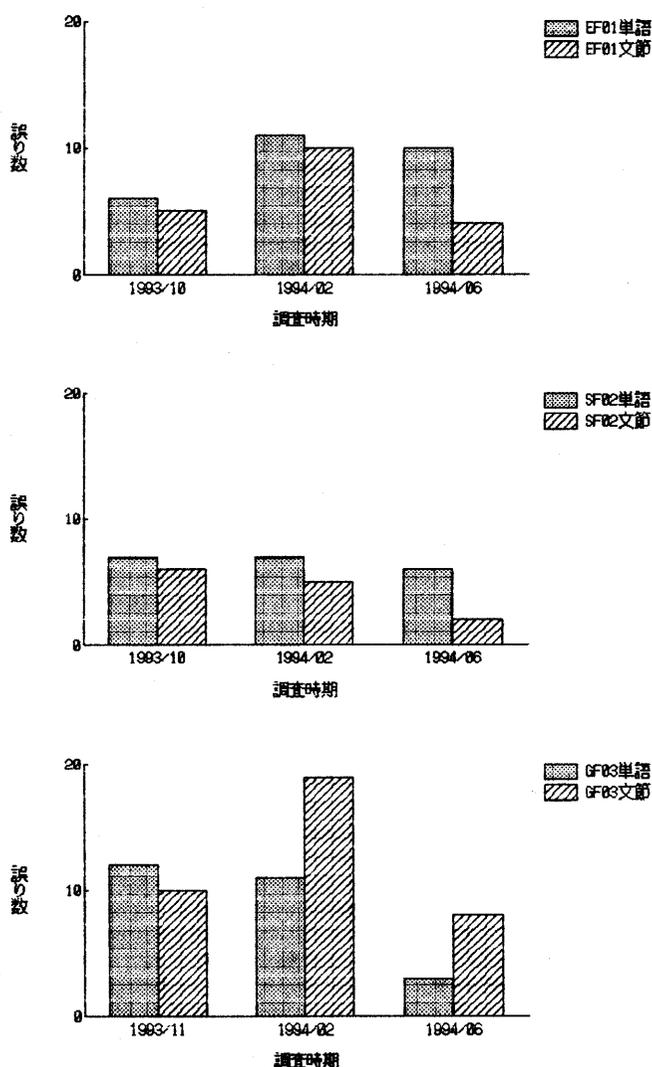


図4 拍の増加と休止の挿入の位置

EF01の発話では、単語内の誤り数は2回目に急増したまま3回目まで数が多いことから、単語の拍感覚があまり向上しなかったことがわかる。一方、文節内の誤り数は、2回目で増加し3回目に減少している。名詞と助詞の接続部分などでの休止の挿入や長音化がいったん増加したが、その後減少して、発話全体のリズムが徐々に整っている。

SF02の発話では、3回の調査を通じて単語内の誤り数はあまり変化していないが、文節内の誤りは漸減している。もともと誤り数が少ないのだが、単語の拍感

覚は1年間であまり変化せず、単語を超えた単位の拍感覚が身につく、発話全体の拍の実現が安定するようになったと言える。

GF03の発話では、拍の誤りの改善が明らかである。単語内の誤りが漸減し、単語の拍感覚が向上している。また、文節内の誤りは、2回目の調査で増えた

ものの3回目では急減し、単語内の拍感覚の向上とともに、発話全体の拍の実現が安定するようになった。

拍の誤りの全体数の変化の様子が山型で似ていたEF01とGF03の発話を比べてみると、EF01では誤りの位置は単語内に多く、GF03では単語を超えた文節内に多いことがわかる。聴覚印象上、GF03の発話の方がEF01よりも聞きやすかったのは、誤り率が低いことに加え、単語内の拍の乱れが少ないため、過剰な休止や長音化により意味の区切れが妨げられないからだろう。

### 2-3. 単語を超えた文節内の拍の増加と休止の挿入

今回の分析対象の発話には拍の増加による誤りが多かったが、特に目立ったのは、名詞と助詞の接続部分の長音化(a)と休止の挿入(b)である。拍の増加による誤り数111個のうち、名詞と助詞の接続部分の長音化は32個で28.8%、休止の挿入は36個で32.4%だった。

- (a) ……シンセツナ オトコノヒトーガ アノ オカーサンニ アノー……  
(b) ……イシガ メガネオカケテルヒト ニ アタッテ……

同じ発話内の同じ名詞でも、接続部分の拍が増加する場合としない場合があり、一定していない。たとえば、2回目の調査時のEF01の発話には、「ひと」という名詞が、助詞「が」を伴って2回、「から」と2回、「を」「に」「の」と1回ずつ、合計7回出てきている。そのうち「ひとを」「ひとの」「ひとから」の3回は正しい拍感覚で発話され、残り4回は「ヒトーガ」「ヒトーニ」「ヒト カラ」のように不要な休止や長音化がある。

また、単語内での拍感覚がはかれないような1拍の語である「き」や「て」に助詞が付いた場合にも、その接続部分に長音化(c)や休止の挿入(d)が見られた。

- (c) ……フーセンガ キーマデニ キマデニ アノー アノトビマシタ……  
(d) ……オーキナ キノ ウエデ ウエノ ウエデ ミツカッタ……

—単語内よりも、名詞と助詞の接続部分での拍の増加や休止の挿入の方が多

いことから、拍の誤りの原因は、単語の拍感覚の習得が不完全であるためだけではないと言える。原因としては、文法能力の足りない学習者が、休止や長音化を行って時間稼ぎをしながら適切な助詞を選択していることが考えられる。母語話者も、言いよどみや息継ぎのために、長音化や休止の挿入を行うことがあるが、そのような現象は文節の切れ目に現れる。学習者は正しく話そうとするあまり、母語話者が行わないような場所で休止の挿入や長音化を行ってしまい、発話全体の拍に実現を崩す結果になってしまった。<sup>3)</sup>

EF01とGF03の発話の拍の誤り率は、いったん増え、また減少する山型に変化している。この2名の被調査者は、2回目の調査の頃には適切な助詞を選択しようと努力しており、その結果、3回目の調査の頃には文法能力が上がり、それに伴い拍の誤りも減ったのだと考えられる。

### 3. おわりに

以上、学習者の自由発話に準ずるストーリーナレーションの発話資料により、拍の誤りの増減や位置を中心に見てきた。結果を以下にまとめる。

(1) 拍の誤り数を発話のみなし全拍数で除した誤り率により、発話の拍の実現の聴覚印象を数値化することができた。

(2) 拍の誤りは、特殊拍の脱落による拍の減少よりも、不要な箇所での長音化や促音化があったり、不要な休止が挿入されたりする拍の増加の方が多く見られた。

(3) 拍の増加や休止の挿入は、単語内よりも、名詞と助詞の接続部分のような、単語を超えた文節単位内に多く現れた。適切な助詞を選択する時間をとっているためと考えられる。

自由発話では、単語内の拍の誤りよりも、単語を超えた文節内の拍の誤りが目立っている。中級以上の日本語学習者に対しては、単語内や短文だけでなく、長い発話単位での練習が必要である。また、日本語母語話者が、言いよどみや息継ぎの際にどのような位置に休止や長音化を行うかを示し、発話全体の拍の実現にも気を配るよう指導しなければならない。

今後は、複数の母語話者による学習者の発話の聴取調査を行い、聴覚印象の

精度を高めたいので、誤り率と母語話者の聴覚印象の相関関係を調べ、学習者の拍感覚の習得状況を評価する方法を確立したい。また、誤りの種類の状況によって、どのように拍感覚の指導法を変えたらよいか考えていきたい。

この研究は、文部省科学研究費補助金一般研究（B）「外国人日本語学習者の韻律習得過程に関する縦断的研究」（No.06451161）（研究代表者 鮎澤孝子）の研究成果の一部である。

#### <注>

- 1) 実際の日本語の発話を用いた実験結果によると、特殊拍を含む長音節の持続時間は、特殊拍を含まない短音節の2倍よりも短く、すべての拍が物理的に等しい持続時間を持つわけではない(藤崎ら, 1977)が、「単語の拍数と持続時間とがほぼ比例する傾向」(杉籐, 1989)がある。一般的な日本語母語話者は、ほぼ仮名一文字に相当する拍を言語の最小単位として意識している(金田一, 1988)と考えられるので、本研究では、拍を、物理的ではなく心理的に等時の単位としてとらえた。
- 2) 本研究に用いたストーリーナレーションの発話資料は、お茶の水女子大学大学院日本語文化専攻の学生による共同研究Monday Projectにもとづくものである。
- 3) Monday Projectでは、10名の日本語母語話者のストーリーナレーションの発話も収集した。その中には、名詞と助詞の間を長音化したり、間に休止を置いたりするような例はなく、文節の切れ目の後に、休止や長音化が入ることが多かった。

例：モモチャントニオカーサンワ\_ディズニールランドニ……

このような長音化や休止は、学習者の発話にも多いが、拍の誤りとしては考えない。

#### <主な参考文献>

- 天沼 寧・大坪一夫・水谷 修 1992 日本語音声学 くろしお出版  
藤崎博也・杉籐美代子 1977 音声の物理的性質 岩波講座 日本語5 音韻  
岩波書店

- 今田滋子 1990 発音の誤用分析の試み 講座 日本語と日本語教育3巻 日本語  
の音声・音韻(下) 明治書院
- 城生伯太郎 1988 ことばのリズム 月刊言語17巻3号 大修館書店
- 川上 葵 1977 日本語音声概説 桜楓社
- 金田一春彦 1988 日本語 新版(上) 岩波書店
- 窪菌晴夫 1993 リズムから見た言語類型論 月刊言語22巻11号 大修館書店
- 大高博美 1988 音節とは何か、モーラとは何か 月刊言語17巻3号 大修館書店
- 杉籾美代子 1989 音節か拍か 講座 日本語と日本語教育2巻 日本語の音声・  
音韻(上) 明治書院

(大東文化大学非常勤講師)

資料 ストーリーナレーションに使用した漫画

